

ANNUAL REPORT 2025



Dialogue *for* People



過去から続く 構造的暴力を 解体していくために

パレスチナ・ガザから隣国のエジプトに逃れてきた人々への取材では「世界に見捨てられているという感覚が一番つらい」という言葉を何度も耳にしました。「私たちはニュースの中の数字ではなく、生身の人間なのだ」と。

年明けから次々と報じられるアメリカやイスラエルによる国際法秩序を無視した軍事行動は、さらなる侵略や軍事行動へとつながる恐れがあります。ウクライナやスーダン、ミャンマー、アフガニスタンなど、あまりにも多くの不条理に眩暈がする現在ですが、こうした殺戮や破壊の根源をたどっていくと、過去の戦争や植民地主義がもたらした構造的暴力が浮かび上がってきます。その影は、家父長制やマイノリティ差別などの形で今の日本社会にも刻印されています。

知ること、そして自身の加害性も含めた問題に光をあて、アップデートし続けること。そのためにも、取材・発信を通してみなさまと考えていけたら幸いです。

認定NPO法人 Dialogue for People

代表理事 佐藤慧





シリア北東部。戦禍を逃れ廃墟となった教会の施設に身を寄せているヤーセルさん一家の末っ子、リタさんは、雪解け水の滴る建物内でクマのぬいぐるみを抱きしめていた。(シリア、2025年/佐藤慧)



2025年5月10日、第6回目となる「難民・移民フェス」が東京都練馬区の平成つつじ公園で開催され、川崎・桜本に暮らす在日コリアンのハルモニたち(おばあさんたち)が歌や踊りを披露した。(東京、2025年/安田菜津紀)



イスラエル軍の侵攻により故郷ガザで大怪我を負いエジプトに搬送されたマハディさんが、命を奪われた家族の写真を見せてくれた。ガザに残された妻も怪我の後遺症により歩行に困難を抱えているという。(エジプト、2025年/佐藤慧)



2025年8月26日、長生炭鉱の労働者とみられる遺骨が海底から収容された。戦時下の事故で183名が犠牲となり、136人は日本に植民地支配されていた朝鮮の人々だった。浜辺で犠牲者の名前を刻んだろうそくが灯された。(山口県宇部、2025年/佐藤慧)

韓国

国家暴力とトラウマ



2024年12月3日、尹錫悦大統領(当時)は突如非常戒厳を宣布しました。民主化を成し遂げたはずの現代に、再び市民の前に現れた戒厳軍。多くの市民が犠牲となった光州民主化運動の経験者は、「45年前の記憶が呼び起こされた」と語りました。日本による植民地支配から連綿と続く暴力の構造と、社会や個人に刻まれたトラウマについて取材しました。

シリア

戦禍の影響は今も



2024年12月、シリアで弾圧の限りを尽くしたアサド政権が崩れ去ってから、1年以上の月日が経ちました。政府による虐殺、国内外の武装勢力による戦闘、大国の思惑の絡み合った軍事侵攻―。それらは人々の日常を破壊し、一度破壊された生活の再建には長い時間を要します。度重なる戦禍に避難生活を強いられている人々を、継続的に訪問しています。

エジプト

ガザからの避難民



イスラエルによるパレスチナの人々の虐殺は終わっていません。国際法違反の占領はヨルダン川西岸地区の人々を引き裂き、隔離されたガザでは「停戦」後も市民が殺され続けています。ガザ南部と地続きのエジプトには、大怪我を負い、家族を失った人々が身を寄せ、避難生活を続けています。エジプトでも困難に直面する人々を取材しました。

パレスチナ

現地からの声



国際社会の眼前で続く虐殺は、その深刻さと反比例するように報道が減っています。現地では多くのジャーナリストが殺され、「声」そのものが、かき消されようとしています。D4Pでは長年協働してきた現地取材パートナーからの寄稿記事を通じ、一人ひとりの目線から、軍事侵攻下に生きる人々の現状を伝えてきました。

REPORTING THEME IN 2025

2025年度の主な取材テーマ

このほかにも、人権に基づいた様々な社会問題の取材を行っております。ぜひウェブサイトからご覧ください。



沖縄

身元不明の全身遺骨



沖縄本島糸満市の山中にある日本軍構築壕付近で、ほぼ全身の、それも埋葬された可能性の高い遺骨が見つかりました。遺骨捜索を続ける具志堅隆松さんは、15歳から20歳前後の兵士の遺骨だと見えています。なぜ人々は殺されなければならなかったのか。「戦死」を尊ぶ国家暴力の危険性について取材を続けています。

福島

原発事故と遺構保存



東京電力福島第一原発が立地している大熊町と双葉町には、除染で出た大量の土壌や廃棄物を管理する「中間貯蔵施設」が建設されました。周辺区域の避難指示は段階的に解除され、大型施設の建設が相次いでいますが、原発事故を後世に伝えるための「遺構保存」については意見が割れています。記憶を未来につなぐ取り組みを取材しました。

強制徴用／加害の歴史



国家が国民を「国のための資材」として扱う社会では、さらに「下」に見られた人々の命は、あまりにも簡単に、非情に、すり潰されていきました。「加害の歴史」を直視せず、命に序列をつける社会は、同様の加害を繰り返す危険性を常にはらんでいます。常磐炭田での強制徴用や長生炭鉱における遺骨捜索などを取材しました。

差別と排除



包括的な差別解消法の存在しない日本では、差別や排外主義に対するブレーキが欠如しています。本来であればそうした差別を抑止する責任を負っている「公」ですら、むしろ選挙や政策を通じて扇動を繰り返しています。基本的人権を社会の土台とするために、差別にNO!を突きつけるのは、メディアの責任でもあります。

TOPICS 2025

さまざまな形で「伝え」「届け」ました。

WEBSITE D4Pウェブサイト記事

外部の方とも連携し、より多様な発信を届けています！

前年に全面リニューアルした公式ウェブサイト。「終戦」80年となった2025年夏には、今もさまざまな場所や人々に残るアジア太平洋戦争の傷跡について、『戦後80年 終わらない「戦争」』として特集ページを公開しました。

また、より多様な発信を届けるために、外部の方と連携した記事制作を進めました。新たにスタートした、社会学者の田口ローレンス吉孝さんによる連載エッセイ『あぎじゃびよ〜通信』は、「身近にありながら気づけていない他者の存在」について日常の中から考えていくことをテーマとし、多くの方に読まれています。

長年南米で取材を続けてきたフォトジャーナリストの柴田大輔さんには、内戦が続いてきたコロンビアに関する前後編の記事を寄稿いただき、今も多数の避難民がいる現状を伝えました。

そして、YouTube動画シリーズ『感情と対話の哲学』(P9参照)でお話いただいた小手川正二郎さんには、スピノフイベントにも登壇いただき、視聴者のみなさんと語り合った内容を記事としても公開しました。より多くの地域やテーマを取り上げられるよう、これからもこうした連携を広げていきます。

D4Pのウェブサイトはこちらから



<https://d4p.world>



特集「戦後80年 終わらない「戦争」」/2025年6月公開



連載エッセイ：ローレンス吉孝の「あぎじゃびよ〜通信」/2025年8月開始



コロンビア 戦時下で忘れられた被害者たち【前後編】(柴田大輔さん寄稿)/2025年10月掲載

2025年度に最も読まれた記事



「加害の歴史」は終わっていない
— 福島・常磐炭田に刻まれた朝鮮人強制労働の記録
(2025/9/26公開)



「拍手をするより、民族浄化を止めるべき」
— 映画『ノー・アザー・ランド』から浮かび上がる圧倒的の不等と暴力
(2025/2/10公開)

おすすめの特集



特集「クルド 迫害の歴史と今」
民族としての権利を認められず、各国でマイノリティとして迫害を受けてきたクルドの人々。今もなお残る暴力の実態と、その中で生きる一人ひとりの姿、共に差別に抗う人々の声を、国内外の現地取材から伝えました。

PHOTO EXHIBITION 写真展開催

『パレスチナと猫』写真展 撮影 高橋美香、安田菜津紀、佐藤慧



『パレスチナの猫』に続く第2弾として、『パレスチナと猫』写真展を企画し、2025年10月より全国各地の書店などを巡回しています。写真家の高橋美香さん、安田菜津紀に加え、今回は佐藤慧も参加。パレスチナ・ヨルダン川西岸地区各地で暮らす猫の姿を通して、現地にある不条理を知り、共に考えるための写真展です。

開催概要	2025年10月8日～10月26日	東京	キャッツミュージック
	2025年11月13日～12月14日	大阪	MoMoBooks
	2026年1月5日～1月25日	神奈川・鎌倉	古民家ゆりいか

【1】イスラム教の聖地のひとつ「岩のドーム」。パレスチナの人々にとってもかけがえない場所だが、イスラエルの入植者や警察は度々挑発行為を繰り返している。(東エルサレム/佐藤慧/2025) 【2】聖地の集まる旧市街の入口にはイスラエル警察による監視所が設けられている。猫には優しいイスラエル警察も、パレスチナ人には容赦なく暴力をふるう。(東エルサレム/佐藤慧/2025) 【3】イスラエル当局に自宅を破壊されたファクリー・アブディアブさんは、プレハブでの生活を余儀なくされている。飼い猫のジュジュは片時もファクリーさんの足元を離れなかった。(東エルサレム・シルワン/安田菜津紀/2025) 【4】旧市街のダマスカス門前でよく会う、パンダと呼ばれていた猫。奥の「詰所」ではイスラエル兵たちが目を光らせ、無作為に通行人たちを呼び止め、時に暴行する。(東エルサレム/安田菜津紀/2024)

YOUTUBE YouTube動画配信 時事ニュースを生配信でお届けしている音声番組をはじめ、様々なコンテンツを配信しています。



新動画シリーズ

『感情と対話の哲学』

國學院大学で哲学を教える小手川正二郎さんが、「感情と対話」というテーマを哲学的観点から解きほぐす本企画。「怒り」や「恐れ」など全5回の動画を配信したほか、視聴者と語り合うスピノフイベントも実施。今後の続編もご期待ください。



YouTubeで見る



Voice of People

Dialogue for Peopleのジャーナリストが訪れた世界を、その地域に暮らす人々の声とともにお届けする動画シリーズ。2025年度はパレスチナとイラク、そして広島県大久野島を舞台に3本の動画を配信しました。



Radio Dialogue

今この瞬間に起きている時事問題から構造的な問題まで、多彩なゲスト、そしてリスナーのみなさんと一緒に考えていく音声配信番組。2025年度も50本の動画を配信しました。

『Radio Dialogue』はPodcastでも視聴可能です！



Spotify Apple Podcast

MOVIE SCREENING 映画上映会

ガザで暮らす家族をもつ人々のドキュメンタリー映画
『Not Just Your Picture キラーニ 一家の物語』
上映会&アフタートーク

登壇者 坂本美雨さん ミュージシャン
安田菜津紀 D4P副代表/フォトジャーナリスト

2025年3月28日、ドキュメンタリー映画『Not Just Your Picture キラーニ 一家の物語』の上映会&アフタートークを会場とYouTube配信にて開催しました。会場230名、YouTube配信280名の方にご参加・お申し込みいただきました。

ガザの人々が強いられる不条理は、2023年10月に始まったものではありません。本映画では、2014年に起こった大規模攻撃を取り上げています。

アフタートークでは、ガザへの支援の輪を広げてこられた、ミュージシャンの坂本美雨さんと共に、パレスチナでの虐殺と日本にいる私たちができることについてお話ししました。坂本さんからは、「ニュースでは『何人殺された』と簡単に言われますけれども、その一人ひとりにこの映画と同じくらいの物語があるということを、映画を見終わってずっと考えていました」というご感想をいただきました。

ご参加頂いた方々からは、「心に響くお話でした」「自分にできることを考え、始めていきたいです」などのご感想を多数いただきました。パレスチナでの虐殺は今も続いています。今回上映した映画やトークをきっかけに、パレスチナへの支援・関心の輪が広がっていくことを強く願います。



FREE MAGAZINE フリーマガジン
VOICE OF LIFE



Vol.9 クルド自治区

クルド人への
民族浄化

ハラブジャの記憶

長年にわたり民族としての権利を認められず、少数民族として迫害を受けてきたクルドの人々。1980年代のイラン・イラク戦争時に化学兵器を投下されたハラブジャの街では、その被害が今も続いています。



Vol.10 日本

裁かれなかった
日本軍の毒ガス使用

毒ガス製造の島が問う
加害の歴史

瀬戸内海国立公園のほぼ中央に位置する大久野島は、1929年から15年間、日本陸軍の指揮の下、毒ガスを製造し、多くの人々の命を奪いました。戦後問われなかった加害の歴史に迫りました。

BOOK 書籍



遺骨と祈り 著/安田菜津紀 産業編集センター 1,600円(税込) 2025年5月22日発売

死者をないがしろにする社会が、生きた人間の尊厳を守れるのか?安田菜津紀が、福島、沖縄、パレスチナを訪れ、不条理を強いられ生きる人々の姿を追った、6年間の行動と思考の記録。原発事故で娘・汐凧さんの捜索を阻まれてきた木村紀夫さん。沖縄で遺骨収集を続け、辺野古基地建設が戦没者をも冒険しながら推し進められようとするに抗してきた具志堅隆松さん。具志堅さんが福島県大熊町を訪れ、帰還困難区域で汐凧さんの大腿骨を発見したのは2022年1月のことでした。この本は当初、二人の交流を軸に編む予定でした。ところがパレスチナ・ガザ地区での虐殺が起き、二人もその不条理と向き合うことになります。今起きている民族浄化と人間の尊厳を踏みじめるあらゆることに、抗う意思を込めた一冊です。

数字で見る

D4PWeb記事	98本
YouTube動画	62本
講演	71件
出演	38回
執筆	112件
インタビュー/対談	27件
撮影/写真提供	12件
写真展	11件
自主イベント開催	3回
出版関連	1冊
フリーマガジン刊行	2件

連載

2014年4月~	CAPA(ワン・パブリッシング) 「ドキュメンタリー写真家のメッセージ」
2021年3月~	月刊「ヒューマンライツ」(部落解放・人権研究所) 「言葉と写真で世界をみつめる」
2021年5月~	生活と自治(生活クラブ連合会) 「対話する日々の中で」
2022年2月~	沖縄タイムス 連載
2023年4月~	新聞三社連合「社会時評」
2024年3月~	みんなのねがい(全国障害者問題研究会) 「心に種をまく」
2024年7月~	朝日新聞「コメントプラス」

レギュラー出演番組

月1回~	TBSテレビ「サンデーモーニング」コメンテーター
月2回~	TBSラジオ「荻上チキ・Session」コメンテーター

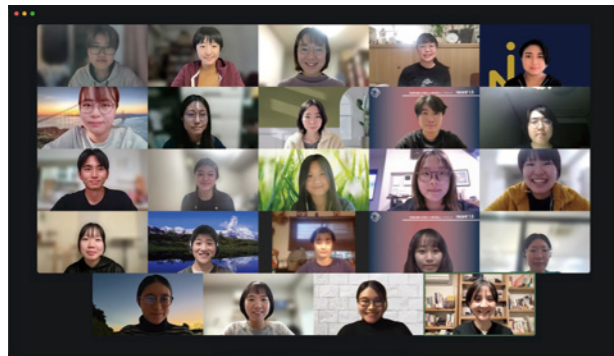
組織体制の強化に努めています

みなさまのご支援により、D4Pは2025年3月に設立6年を迎えることができました。これからも活動を長く続けていくため、組織体制の強化にも取り組んでいます。まず、発信を行う体制を強化しました。これまで安田と佐藤を中心に発信を行ってきましたが、既存の職員の業務を整理し、新たに発信を行うためのチームを立ち上げ、2チーム体制としました。新チームは、外部の方による寄稿記事や、YouTubeでの発信、イベントなどの企画制作を行っています。2025年夏には新しい職員を1名採用し、フルタイム6名、パートタイム1名の体制となりました。こうした中、法人設立後初めて、職員が育児休業を取得することもできました。また、職員の心理的な安全と安心を確保しながら業務を行うことを目的に、産業医によるストレスチェックを導入しました。こうした組織体制の強化に、引き続き取り組んでまいります。

若手発信者
育成事業

次世代と共に歩む

「継続的な社会のアップデートのため次世代を育む」これはD4Pのミッションの一つです。次世代へ学びの機会を提供し、社会との向き合い方や、「発信」の役割・価値の理解を深め、共に“社会のアップデート”に取り組んでいきます。

D4Pメディア発信者
講座2025

今回で5回目の開催となった「D4Pメディア発信者講座」。昨年に続き、18歳～29歳までを対象に、オンラインにて開催しました。プログラムは、D4P代表である佐藤慧から始まり、評論家の荻上チキさん、公認心理師でLGBTアクティビストの東小雪さん、難民支援協会代表の石川えりさん、弁護士師岡康子さん、ドキュメンタリー映像作家の久保田徹さんに講義をいただいたほか、初日のアイスブレイクと両日講義後の振り返りの時間を徳田太郎さんにファシリテートしていただきました。例年同様、全国各地の多くの方からお申込みいただき、海外からの参加者を含め、25名が受講しました。

受講生の感想

「第三者」である自分が当事者の方々にどのように寄り添えばよいのか、そもそも自分に発信する資格があるのか。そんなことを考えてずっと葛藤していました。しかし、この講座を通して、社会の中で力強く声をあげ続ける当事者の方々、その声を丁寧に「伝え」たり「支え」たりしている人たち、そして私と同じように迷いを抱えながらも、それでも自分なりの答えを探し、あきらめずに発信を続けている仲間たちに出会うことができました。

プログラム

- 1 伝える姿勢、伝える視線
講師：佐藤慧
D4P代表/フォトジャーナリスト
- 2 〈置いてけぼり〉のメディア論
講師：荻上チキさん
評論家
- 3 LGBTについて伝えることの意義
講師：東小雪さん
公認心理師/LGBTアクティビスト
- 4・8 シェアリングタイム
担当：徳田太郎さん
ファシリテーター
- 5 難民について発信する
講師：石川えりさん
認定NPO法人難民支援協会代表理事
- 6 ヘイトスピーチと報道
講師：師岡康子さん
弁護士・外国人 인권法連絡会事務局長
- 7 ドキュメンタリーの制作倫理と技術
講師：久保田徹さん
ドキュメンタリー映像作家

講師の方からの学び、参加者の方との意見交換を通しての学びの両方があり、今後自分がどういったことを更に深めていきたいか気づききっかけになりました。

「ひとりひとりの物語に焦点を当てる」。現代の社会で敬遠されそうな報道方法ですが、その報道が誰かの人生を照らし、誰かの問題意識を揺り動かすことになると学びました。

ウェブサイトレポートを読む

「伝える」が「伝わる」に変わった瞬間—「D4Pメディア発信者講座(第5期)」開催レポート ▶



友人の母が作ってくれたマックルーベ。

世界をつなぐ
「食事」の思い出

written by 佐藤慧

取材を続ける中で出会う、豊かな文化のひとつに「食事」があります。ときには、なかなか日本では見たこともないような食事にも出会います。たとえばザンビアという国では、主食はトウモロコシの粉をお湯で溶いてお餅のようにこねる「ンシマ」というものでした。そして副菜には、かぼちやの葉っぱや干した魚のトマト煮込みなどをよく食べました。「芋虫」の類は始めは食わず嫌いでしたが、慣れると味も食感も素晴らしく、色々な種類の芋虫を試しました。



ザンビアのマーケットで売られている乾燥芋虫。

そもそも、なんとなく虫食に苦手な気持ちがあったのは、単に「経験したことがない」からだったということに気づきます。「日本では

生魚も、エビも、タコも食べるんだよ」というと、「えー！」と驚かれます。たしかに、エビやカニの姿かたちなど、知らなかったらなんとも奇妙な生き物に見えるでしょう。



カイロで食べたコシャリ。

日本にも持って帰りたい!と思う食事もあります。去年エジプトではじめて食べた「コシャリ」もそんな料理でした。米、パスタ(短いマカロニ)、レンズ豆、ヒヨコ豆などを混ぜ合わせ、トマトソースやフライドオニオンをトッピングし、お好みで唐辛子のきいたソースや、ニンニクと酢のソースなどをかけ、混ぜ合わせて食べます。そしてこの多様な食材を口に放り込むときに、思うのです。世界は

つながっているのだと。米とレンズ豆を合わせて食べる料理は、インドに「キチュリ」というものがあるそうです。19世紀、イギリスがインドを植民地支配していた時代、エジプトもまたイギリスの勢力下にあいました。この時期にこうした文化が渡ってきた可能性も指摘されています。そして「パスタ」の融合ですが、エジプトに住んでいたイタリア人コミュニティの影響という説も。そして味の決め手となるトマトソースや辛味ソース。これらの材料であるトマトや唐辛子は、大航海時代を経て、アステカやインカから世界中に広まったものです。この一皿に凝縮された人類の移動と交流の歴史—そこには植民地支配や搾取という負の構造も大いにありますが—を思う時、世界の多様性や可能性も感じるのです。

「食事」はまた、人と人の心を近づける接着剤でもあります。取材先各地で頂いた多くの料理は、どこで食べるどんなものであっても、たくさんの愛情と出会ったことへの感謝がこめられていました。「お茶飲んでいきなよ」から始まり、「せっかくだから夕飯も」「食後のデザートもどうぞ」「もう遅いんだから泊まっていきなさい」と、その後何度も訪問する間柄になった方々も多くいます。

争いや排除が続く世界ですが、豊かな資源や文化を奪い合うのではなく、ともにわかちあい、「世界は素晴らしい」と思える関係性を、みなさんと築いていきたいです。

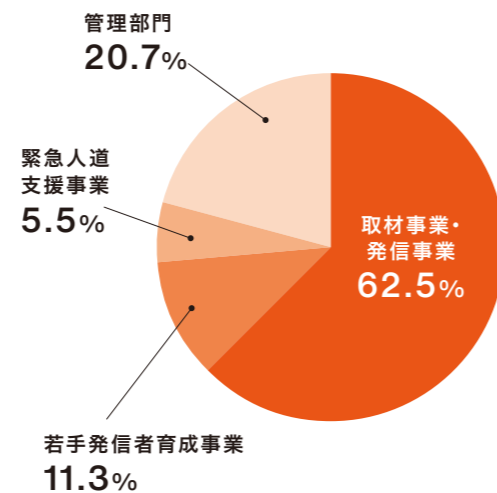
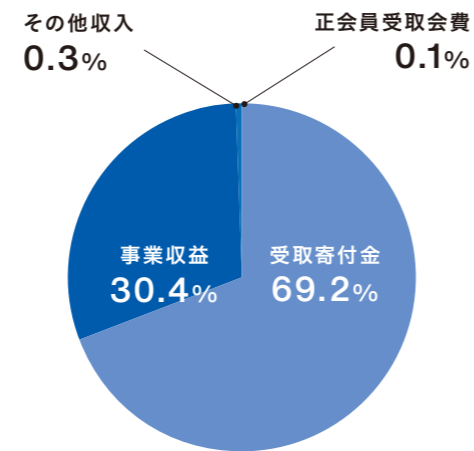
会計報告

収入の部

項目	金額(単位:円)
正会員受取会費	96,000
受取寄付金	55,933,480
事業収益	24,560,732
その他収入	261,436
経常収益計	80,851,648

支出の部

項目	金額(単位:円)
取材事業・発信事業	40,377,996
若手発信者育成事業	7,319,099
緊急人道支援事業	3,537,960
管理部門	13,407,362
経常費用計	64,642,417



2026年4月13日

監事 石井宏明

監事 潤間拓郎

私共は、特定非営利活動促進法第18条に基づき、特定非営利活動法人Dialogue for Peopleの2025年度(2025年2月1日から2026年1月31日)の業務監査及び会計監査を行い、その結果、業務が適正に執行されており、会計について証拠書類及び関係書類は、記載すべき事項を正しく記載し、また支出すべて領収書等の証憑と合致していることを認め、ここに報告いたします。

※活動報告書および財務諸表の全体はDialogue for Peopleウェブサイトにてご確認ください。
<https://d4p.world/about/>

支援者のみなさんの声



安田 琴絵さん

サポーターとなり、いつからか自分もD4Pの目指す「すべての人の基本的人権が守られ、さまざまな違いを越えて多様性が認められる世界」の実現を願うようになりました。過去の私は、世界に対し「無関心」でした。それがどんなに暴力的なふるまいであるか、D4Pに出会わなければ今でも気づくことなく、他者への想像力を欠き自身の特権に無自覚なまま生きていたかもしれません。小さな声を伝えてくれるD4Pの活動を今後も支援し続けます。

中尾 太一さん
(プロボノ)

情報が錯綜する現代において、当事者の声を直接届けるD4Pの活動は、信頼できる一次情報の発信源として非常に意義のあることです。緊迫感のある現場を、写真や文章といった多様なメディアを通じて伝え、言葉を越えた心への訴えによって、遠い地の出来事を自分事として捉える機会をもらっています。支援者としても主体性を失わないよう心がけながら、対話の種を蒔き続けるD4Pの姿勢を応援しています。



横山 絵里さん

インターネットの普及で、大量の情報からフィルターバブルの影響を受けずに情報を得ることが難しくなっていると感じています。そんな時代だからこそ、「この情報は自分が選択したものだ」という実感が欲しくて、D4Pのサポーターになりました。ネット上の情報の流れの速さに戸惑うことも多い私ですが、D4Pの記事をネットで読み、YouTubeで配信を聞くことで、今何が起きていて、何が問題なのかを考える材料にしています。

組織概要

名称	特定非営利活動法人Dialogue for People (ダイアログ フォー ピープル)
所在地	〒165-0026 東京都中野区新井2-10-3 KSビル202
設立	2019年3月23日
法人格取得	2019年5月22日
認定取得	2022年1月7日 有効期間:2022年1月7日から2027年1月6日まで 番号:3生都管第1069号

代表理事 佐藤 慧 / D4P事務局員

副代表理事 安田 菜津紀 / D4P事務局員
中山 大輔 / D4P事務局員

理事 石川 梵 / 写真家・映画監督
小澤 いぶき / 児童精神科医
在間 文康 / 弁護士

監事 石井 宏明 / 団体職員
潤間 拓郎 / 行政書士

事務局
スタッフ
(2025年度) フルタイム職員:6名
パートタイム職員:1名
インターン:のべ16名

ご支援のお願い

「伝える」を「支える」ことから、 世界と「つながる」

国内外の取材、記事や動画の発信、自主企画の運営などのDialogue for Peopleの活動は、みなさまからのご寄付に支えられています。境界線を越えた平和な世界を目指すための、「伝える活動」へのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

ご寄付のお申し込みはウェブサイトから

月々3,000円から始められる
マンスリーサポーター募集中!

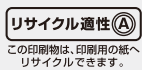
Dialogue for Peopleは「認定NPO法人」です。
ご寄付は税控除の対象となります。

<https://d4p.world/donate/>



Dialogue for PeopleはSNSでも情報発信しています。

X(Twitter) Instagram Threads
Facebook 公式LINE YouTube



再生可能エネルギー100%で、印刷工場が所有する施設や車両、購入した電力などエネルギーの製造時に排出されるCO₂全量をカーボンオフセット(相殺)した「CO₂ゼロ印刷」で印刷しています。また大気汚染の原因物質であるVOC(揮発性有機化合物)を削減したノンVOCインキを使用しています。

表紙写真について

シリア北東部の国内避難民キャンプ。戦火を逃れてきた人々の生活は7年に及び、このキャンプで生まれた子どもも多い。※写真は一部修正を加えています。(2025年 佐藤慧撮影)